

幸せな人生とするヒント

～ ステキな人生・子育てのために ～

= 下 =

子どもが育つこと、親として育つことについて

私たちは、日々「表現」をしつつ生活し、育ちます。大人も同様です。

私は、私たちの能力・人間性などの育ちに関して《育ちモデル》を提案し、自身の講演などで活用しています。

提案する《育ちモデル》は、ピラミッド型、安定した正三角形に例え、四つの要素をキーワードとして示しました。

「表現」と、これを支える「理解」、さらに理解を育む「体験・意欲」と、この根底に「目と目・安心・きずな」を置きました。

《育ちモデル》は、鏡餅の四段重ねにも例えています。安定した形で、大きく豊かに育って欲しい願いがあります。

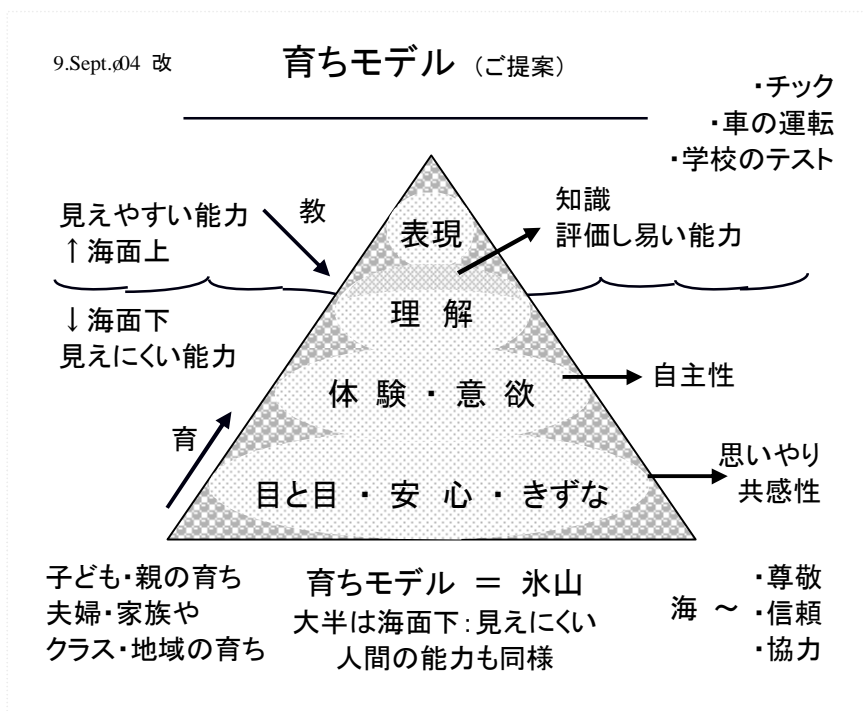
そして、提案する《育ちモデル》は、「赤ちゃんの育ち」、「乳幼児の育ち」、「学童期・青年期の育ち」、「母としての育ち・父親としての育ち」、「社会人としての育ち」、「祖父母としての育ち」など、人間の特権と言える一生を通じて育ち続けることができる個人の育ちモデルとしてのみならず、「夫婦としての育ち」、「家族の育ち」、「クラスの育ち」、「職場の育ち」、「地域の育ち」など、多様に展開できると考えています。

また、《育ちモデル》を氷山に例えてもいます。氷山は、大半が海の中にあり、一見して全体が見えません。見えている部分にとらわれていると、全体を見誤ることになります。

私たち人間の場合も同様で、見える（見えやすい）能力・育ちと、見えない（見えにくい）能力・育ちがあります。

海水面を理解の中程におきました。見えやすい能力は、理解の中で「知識」として考えることが出来ましょう。海面下の能力は体験に基づいた、体が覚え込んだものとみなします。

「学校のテスト」はどうでしょうか？ テストは、教えられ、覚えた知識を、決められた時間内に決められた方式で答えるわけです。明治以降の日本の学校教育は、国として必要に迫られて、（欧米先進国に学び追いつく国策で、）目に見える海面上の部分を重要視してきま



した。今日まで、子どもたちは、大学入試を頂点として、テストの点数・偏差値に縛られ、見える能力・育ちの善し悪しに捕らわれてきました。ご両親・家族もそうでしょう。

今日、私たちは、長い人生、現代の日本・これからの日本において、海面下の能力・育ちがとても大切だと気づいています。

「自動車の運転」に例えましょう。学科試験は目に見える能力です。学科試験が満点であったから、あなたは素晴らしい、さあ運転してください。となっても、運転が出来るはずがありません。ハンドルの遊び・廻し具合や、アクセル・ブレーキのかかり具合など、体で覚えることが必須になります。偏差値のみでは、ステキな育ち（幸せ感）は得られません。

【付：この資料も、読んで頭で（知識として）理解するに留まらず、練習を重ねて、身に付ける・自然に言動出来るようになることが願いとなります。健康的な心、幸せな心の使い方が出来るように、機会あるごとに繰り返し、繰り返しお読みいただいて、実践していただけることが願いなのです。そう「自動車の運転」のように！です。】

子どもたちの問題行動（～大人が問題だととらえている言動）はどうでしょう。

例えば、「チック」です。子どもが（大人も）、緊張し、どう処理して良いか分からないけれど、とにかく一生懸命に、まじめに、一途になっているときに、まぶたを盛んにピクつかせたり、首や肩を振る動作を繰り返したりするのが「チック」です。

大人にとっては、チックが過剰な不自然な動作であるがゆえに、つい「止めなさい。格好悪い」、「ほら、またしている。止めなさいと言ったでしょ！」「他の子にいじめられるぞ！」と、自身も緊張を高めて、指示・命令・強要（脅し）しがちです。つまり、目に見える「表現」に対して、「知識」として、止める・格好悪いなど、表現を否定し、（そうせざるを得ないでいるその子の表現を否定し、）さらに緊張させていることになるのです。長期化・固定化することはあっても、問題解決には至りません。

チックの解決法は、その子を“信頼”し、リラックスできる対応・環境づくりや、全身運動や歌うなど発散出来ることを、共に楽しむことにあります。

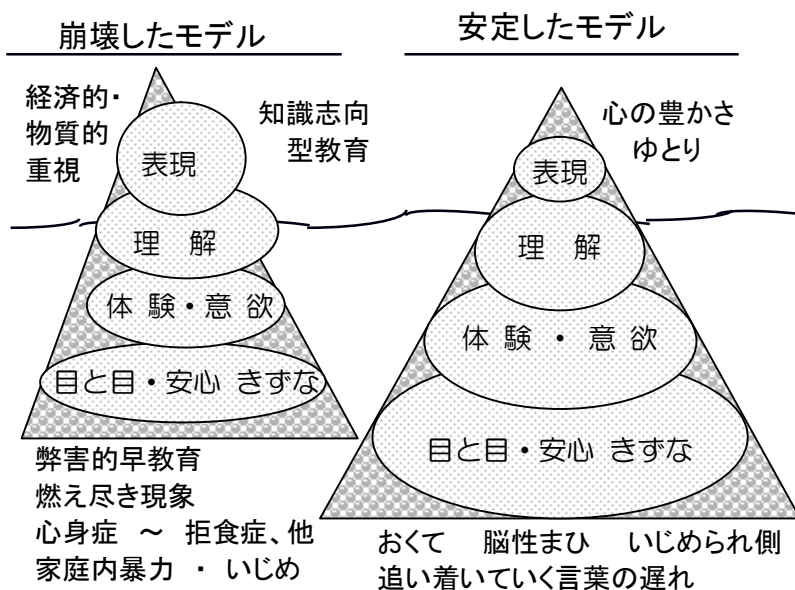
「問題行動だ」と思えた場合は、見えない育ちが萎えている・乱れている・混乱している（鏡餅が傾いている）サインを子どもが発していると考えると良いのです。

子どもたちが育つ上で、私たちはどんなイメージを大切にしているのでしょうか？・・・
多くの方は、「自主性」や、思いやる心＝「共感性」を大切にされましょう。

*右の図は「育ちモデル」を変形させたものです。

テスト・小論文において、自主性や共感性に関する問題を作成することができます。

例えば、入学試験で作家の文章が引用されて、「自主性と共感性について論ぜよ」といった問題です。何回か添削を受け、これなら大丈夫だとオスミツキを貰い、実際に入学試験に問題が出されて、満点だったとします。「やったあ、自分は自主性と思いやりは百点だ！！だから、人間として素晴らしい」



とは、誰も認めません。

「自主性」や「共感性」の本物は、見えない・見えにくい能力として、海面下でじっくりと「育つ」ものであり、教えられ、知識としてあるのは偽物といえます。

テレビ・ゲーム等に浸る生活でも「自主性」や「共感性」の本物は育ちません。

目に見えない・見えにくい能力は、日々刻々と、人と人との心の交わりの中で、熟成されるように育つもので、「尊敬・信頼・協力」の海において、すてきに育まれるわけです。

今日、大人も子どももストレスの多い生活に陥りがちです。そのことに気づき、大人は自らを「癒す」ことを心がけたいものです。

家族であるがゆえに「癒し」の関係性を築きたく願います。家族が集う家庭であるがゆえに「癒し」の環境が必要であり、「癒され合う」ことは、大人にとって、子どもにとっても、これからの時代においてかけがえのないこととなります。

そして、癒す・癒しあうためのコツは、相手の表現を受容し、気持ちを伝えることば・姿勢を基本におくことです。

ただし、社会的なルールから外れる場合は、きちんと「ダメ！」を言って、止めさせることが原則です。言葉かけのみで、行動を許しては、単に意味のない“言葉”に留まってしまい、困った関係性を築くこととなります。

ある講演会で事例の話をお聞きしました。

東京大学を卒業し一流会社に就職した彼は、昼休みになり、若い女性達が食事に出かけても、課長と二人で仕事の整理をしていました。そこに会社の大切な客がひょっこりと来られて、課長は「やあやあ久しぶり！お元気そうで・・・」と、話し始めました。

課長は（お茶を・・・）「君、お茶を入れてくれたまえ」と、新人の彼に託しました。

彼は（お茶を入れる・・・、えーっと、トイレの横に・・・）その場へ移動し（お茶を入れるには・・・、ええーっと、お母さんが入れてくれるのは・・・）まとまりのない行動をしていました。

課長は話しながら（アレッ、まだお茶を出してくれない・・・遅いなあと）お茶を待っています。彼が困っているところに、昼食を終えた女性が「君、何しているの？」「課長にお茶を入れてくれと頼まれて・・・」「何しているの？ ダメネェ。私が入れてあげるネッ」と、好意で交代し、お茶を入れました。翌日から、彼は会社に行けなくなったそうです。

結局、ご家族と彼は「登社拒否」で悩み、講演者に相談に行かれた云々が概要です。

知識学習中心で、テストの点数が良く、オリコウサンで、一流大学に進み、一流会社に入った段階までは、親もホクホクで、本人も挫折を知らず、失敗体験も乏しかったのでしょう。

私たち日本人は、ゆっくり育つ子どもたち、いわば目に見える育ちが遅い子どもに対して、とにかく、その力をそぐ（削ぐ・殺ぐ）働きかけをする傾向があります。

これまでの学校教育において、目に見える形、即ち、テストの点数の善し悪しで子どもを評価しがちで、一人ひとり異なる育ちの過程にじっくりと付き合うことに慣らされていないことに気づきたく思います。

チンパンジーとオランウータンに学ぶ子育ての盲点

次頁の図は、故・河合雅雄先生 著「子どもと自然」（岩波新書）から引用した概要です。

設定された到達目標をどちらが先に達成するかという、チンパンジーとオランウータンの

能力を比較しようとする実験の概略はこうです。

チンパンジーは、盛んに行動し、失敗してもへこたれず、再びチャレンジしていった。やがて、目標を達成することができた。

オランウータンは、はじめに少し行動し、まもなくほとんど動かなくなった。が、しばらくして動き始めて、目標を達成した。

同じ時間で目標に達したので、結局、能力に大きな差は認められないと結論した。

オランウータンは、目に見える行動を開始するまで、内的に熟考していたのだろうと考えることができます。

チンパンジー・オランウータンを子どもに例え、実験者を子どもの親や学校の先生に例えると、以下のように考えることができます。

オランウータン型（オラン型）は、動かず、目につきやすい反応が乏しいため、一体やる気があるのかも分らず、能力が低いようにもとらえられかねません。ところが実は、オラン型は、いわばオクテで、ゆっくりと育つタイプともいえましょう。しかし、日本の親や学校側が陥りやすいのは、オラン型の子どもに対して、つい、あぁしろ、こうしろ、とか、まだ出来ないのかなど、急がせたり、強要したり脅したりでしょう。オラン型の子どもは、潜在している能力を発揮する機会を奪われて、自信を失うことにもなり得ます。

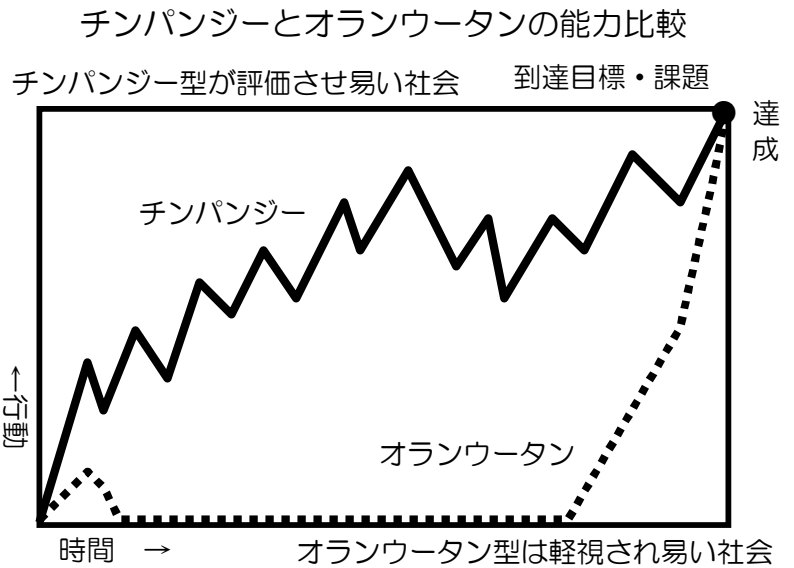
一方、チンパンジー型（チンパ型）は、例えば、授業において、よく手を挙げ、発言し、失敗しても、チャレンジを繰り返すため、教え甲斐があって、おりこうに見えるわけです。つまり、チンパ型の子どもは良い子として見られやすく、さらに、過剰に評価されがちです。過剰な期待を抱いて子どもに背伸びさせたり、あせらせたりで、結局は、燃え尽きてしまうような子どももあり得ましょうし、一方で、虚勢を張ったり、イライラしたりする子どももあり得ましょう。

いかがでしょうか。

あなたご自身の育ちの過程も、時間に急かされ、知識学習を強要されたりで、焦ったり、イライラしたりといったことが多々あったのではありませんか？

そして、今、あなたの子育てや家族の関係性はどのようなでしょう。

子どもたちの多様な個性、兄弟姉妹といえども一人一人異なる発達の過程にじっくりとつき合える子育てを子どもたちは望んでいます。



本資料は、外来診療における説明・解説用に作成したものです。

智頭病院 小児科 科長 大谷 恭一

インターネットで検索 → 「智頭病院小児科」情報満載！ ご覧ください。